

『ドイツ文学入門』(その3) 原田義人著
河出書房 市民文庫 120
昭和27(1952)年4月15日発行 定価80円

ドイツ文学とは何であったか

これまでドイツ文学とは何であるかについて、すなわち、その現状と特質というような面から少しく考えてみたわけですが、今度はドイツ文学は何であったかについて概約を眺めてみましょう。しかし、それについては無数の文学史がわれわれに教えてくれていますし、それらの文学史に挙げられた無数の作家と作品とは、われわれが一生かかってもほんの一部しか実際に読むことができません。そこでここでは、常識となっている大づかみな時代の流れを見、今までのところ重要であるとされている少数の作家や作品の名を挙げるにとどめます。文学史を書き変えたり、埋没している作家を発掘することは、研究者の喜びです。諸君はみずから研究してゆかれるうちに、そうした喜びを見出されることでしょう。けれどもその前に、大体の文学史の流れを把握することは、自分のテーマを見出したり、自分なりの文学史を描くうえにも、決して無益ではないと考えます。これまで我国で刊行されたドイツ文学史の主要なものは、シェーラー著・吹田順助氏他訳『ドイツ文学史』四巻(創元社)と鼓常良『ドイツ文学史』(白水社)との二著でしょう。前者は、実証主義的・文献学的な立場に立ったドイツ文学史の古典的作品であります。ただロマン派までで終わっていて、ヴァルツェルが増補したそれ以後の部分が翻訳権の関係でまだ出版されていないのは残念です。後者は日本人による最も大きなものですが、戦前に書かれたものでナチスの文学理論の影響を受けた偏向を持っている点に注意せねばなりません。ところが、最近、上村清延氏『ドイツ文学史概説』(福村書店)が上梓されました。豊富な資料を使い、作品の細部に亘って論評も加えた労作であり、大いに参考になるものと思います。

1 中世文学

古高ドイツ語時代 古いゲルマンの文学は、遺っているものがわずかであるばかりでなく、いわゆる古高ドイツ語(古い高地ドイツ語)が低地のそれと分離してドイツ語の初期をなしてからも、言語的に今日のドイツ語とは距りが大きいので、その研究は少数の専門学者の手に委ねられ、いわんや外国人にとっては興味が薄い分野です。シェーラーなどは紀元600年頃にドイツ文学の第一の隆盛期があったと推定していますが、そのくわしいことはわかりません。

十一世紀の半ばまでは、文学はほとんど僧侶たちに独占されて、宗教的感化の作品だけが創り出されていたものと思われまます。830年頃ザクセンで書かれた宗教叙事詩『救世主』、僧オトフリートにより870年頃書かれた『福音書』等がそれです。これに対して、世俗文学として多くの英雄詩が伝承されていたわけですが、九世紀初頭に書き遺された『ヒルデブラントの歌』は、今はほんのわずかの断片ですがドイツ本来の叙事詩として、珍重されています。追放されてフン族の許に身を寄せていたヒルデブラントが、戦場において故国に遺した子ハードゥブラントに敵として相見え、これを倒さねばならないという英雄悲劇を歌ったものであります。その簡潔で力強い表現と、古ゲルマンの道徳を偲ばせる精神内容とによって、忘れられぬ作品でしょう。カロリナー王朝の祖カール大帝は、都アーヘンを中心にドイツ語文学の隆盛を計ったのですが、その後を継ぐものなく、再びラテン語が優勢となりました。ルードウィヒ三世が881年ノルマン人を破ったとき一僧侶によって捧げられた讃美の歌『ルードウィヒの歌』は、今日遺っている古高文学の主要な作品のひとつです。

中高ドイツ語文学 十一世紀後半になっていわゆる吟遊詩人が出現し、世俗の題材を扱い、フランスの詩歌を翻訳するようになりました。彼らは確かに、ドイツ語を豊富にし洗練せしめるのに、功績が多かったといえます。一方、社会的には封建制度が発達し、それにともない諸侯のフランス、イタリーの貴族との交渉が盛んとなり、騎士文化の隆

盛を見ました。中高ドイツ語(中世高地ドイツ語)は、十三世紀に整えられ、ゲルマン古来の民衆的叙事詩、騎士叙事詩、そしてミンネザング(愛の歌)と呼ばれた詩のジャンルが開化を誇りました。しかし十四世紀には、市民階級が騎士のそれに代って次第に勢力を伸張し、中世末期においては文学も主流は市民文学に移りました。市民文学は詩の分野においてはむしろ低調で、騎士文学の模倣や教訓詩となり、また職匠詩人の手よっての技術的な固定へと傾いたのです。それに反して、散文がこの時代に、文学としての位置を次第に強化し始めたことは、特に注目に値します。その面で特に功績があったのは、十四世紀の神秘主義者たちであったと思われます。中世末期には風刺文学が生まれ、また演劇も僧院の薄暗がりを出て町々の活気ある広場に移ったことは注意しなければならぬ点ですが、その高い作品はむしろ次の時代において始めて見出されるでしょう。

民族叙事詩 すでに古くから伝承されていたニーベルンゲン伝説は、十二世紀末頃中高ドイツ語によって集大成されました。それはジークフリート伝説とブルゴント王国の滅亡との二要素を結合し、39の歌(原語ではアヴァンチュール)から成り、四行一節で九千行を超える長詩です。ニーベルンゲンの宝を求めるジークフリートの冒険、クリームヒルトとの結婚、勇士ハーゲンや女傑ブルンヒルトの活躍、主人公の暗殺、そしてクリームヒルトの復讐を物語ったこの作品は、無数の改作によって児童にも知られているものですが、原作は構成の整備、筋の劇的な運び、性格や心理の雄勁な表現、によって、このジャンルの代表作です。

『グードルーン』も、ほぼ同時代の同じく作者不詳の大叙事詩ですが、これでは狂暴なアイルランド王ハーゲンの娘ヒルデとその娘グードルーンの母娘の冒険を扱っています。『ニーベルンゲン』よりも悲劇的ではないが、一層流暢で集中的な表現をもって、一層人間的な人物たちを描いた作品です。そのほかに『ディートリヒ・フォン・ベルン王』を扱った一群の叙事詩も、このジャンルに属するものです。

宮廷叙事詩 民間のゲルマン的英雄叙事詩に対して、騎士文学として、また多かれ少かれラテン系文学の影響の下に、シュターフェン王朝の宮廷叙事詩が華々しい開化を見せました。民族叙事詩に比べて、このジャンルの叙事詩はいっそう文士らしい文士によって書かれたものであり、フランスのチボーデの図式を借りれば、前者が男性的様式であるのに対して、後者は女性的様式であります。

まずハインリヒ・フォン・フェルデケは、十二世紀末に『エネイデ』を書きましたが、これはフランスの『エネアス』に倣い、古代の有名な物語を中世騎士の理想像につくり上げたもので、このジャンルの先頭に立っています。彼に続いた作家たちは、題材を多くブルトン伝説アーサー王の円卓騎士にとって多くの作品を書きました。

ハルトマン・フォン・アウエは、シュワーベンの小領主でしたが、1200年頃、フランスのクレチアン・ド・トロワに拠って、『エーレック』と『イーワイン』とを書いています。身分の高い美しい貴婦人への愛のためになされる冒険の物語です。彼はまた、宗教的な傾向の強い『グレゴリウス』と『哀れなハインリヒ』とを書いています。前者は1950年トーマス・マンが『選ばれし者』という小説にし、後者はハウプトマンが同名の戯曲につくっています。『哀れなハインリヒ』は、心おごって神から籟病を下された一人の騎士が、彼のために生身の心臓を捧げてその病を癒そうとする卑賤な百姓の小娘の犠牲に憐憫の情を覚え、それによって回心して、娘を殺して自分が助かるよりはむしろ自己の運命を甘受しようとすることによって神に救われるという物語で、身分の卑しい少女への愛を描いた、騎士物語としては異風な作品ですが、心情に満ちた美しい作品で広く愛されています。

ウォルフラム・フォン・エッシェンバッハは、バイエルンの身分の低い騎士でしたが、その『パルチファル』によって騎士叙事詩の完成者とされています。これは主人公パルチファルの、迷誤をくぐって「騎士の典型」である「聖杯の守護者」になるまでの冒険と完成の過程とを描いた作品であります。筋が極めて錯綜し、構成に厳密を欠き、冗漫な

ところが多いのですが、その濃厚な倫理的色彩によって高く評価され、またいわゆるドイツ教養小説の鼻祖とされています。

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクは、1210年頃フランスのトマの『トリスタン』を改作しました。トリスタンとイゾルデとの理想的な一組の男女を描いて、世の道德のうえに超越する愛の絶対的な力を讃えています。ワグナーはキリスト教的精神を高揚した『パルチファル』を作曲しましたが、またこの『トリスタン』をも作曲し、それには異教的ですが融ろけるような、愛の悦びと悲しみを表現しています。原作も同じような流麗な美しさに溢れた作品であります。トーマス・マンやシュトルムの短篇にも使われております。

相良守峯氏『中世宮廷叙事詩研究』(富士出版社)は、英雄叙事詩をも含めて、中世叙事詩の世界の研究書ですが、精しい作品解説が施されていて、われわれはこの時代の最も重要なこのジャンルの文学を大観することができます。

ミンネ・ザングの世界 同じ封建社会は、ミンネザングと呼ばれる抒情詩の分野においても、絢爛たる花を咲かせたのでした。その先頭には恋愛詩人としてのハインリヒ四世があり、その創始者はフリードリヒ・フォン・ハウゼン、最初の独創的詩人はハインリヒ・フォン・モルゲン、最も熟練した技巧の持主は、「ハーゲナウの鶯」と呼ばれたラインマル・フォン・ハーゲナウ、そしてその完成者で王者はワルター・フォン・デル・フォーゲルワイデ(1170-1228)でありました。ワルターは吟遊詩人であり、恋愛詩に簡潔さと真実味とを与えて、それを真の抒情詩の高みにもたらした第一者でしたが、また愛国的詩人として多くの政治詩をもつくり、更に宗教と道德との諸問題とも対決しました。チューリングェン方伯ヘルマンは文学の保護者であり、その宮廷で行われたミンネザングのコンクール、いわゆる「ワルトブルクの歌合戦」は、この時代の抒情詩の隆盛を物語るものでありました。

中世神秘主義文学 前にも述べたように、中世末期には、詩文学に代って散文文学が台頭しました。そのために大きな原動力となったひとつの理由は、諸外国の伝奇文学の翻訳が流行し始めたことでした。そして通俗本は民衆のなかに広く浸透してゆきます。しかし、ここで神秘主義者たちの仕事が忘れられてはならないと思います。そしてそれは、ドイツの文学や思想に長く深い根を下していると思われる神秘主義思想を探ねてゆくうえからも、重要な分野であると考えられます。それはフランドル等の神秘主義と呼応し、またすでに十三世紀においてメヒトヒルト・フォン・マグデブルク(1207-1282)のようなこの系譜の人物を見出すことができます。メヒトヒルトの『神性の流れる光』は低地ドイツ語で書かれ、1340年頃に中高ドイツ語に翻訳されましたが、神との神秘的合一を、中世人独特の素朴さで、ややエロティックに歌ったものです。しかし何よりも、十四世紀の神秘家たち、特にドミニク派の三人の聖職者、すなわちマイスター・エックハルト(1260頃-1327)、ハインリヒ・ゾイゼ、一名ズゾー(1295頃-1366)、ヨハネス・タウラー(1300頃-1361)を挙げなくてはなりません。マイスター・エックハルトは、秀れた説教者であり、また講壇哲学者でもありましたが、聖トーマスとアルベルトス・マグヌスとの思想に養われ、「神秘主義全体の中心人物」でありました。彼はその説教とドイツ語で書かれた著述によって、文学に利するところが大きかったのであります。しかしアヴィニオンの法皇によって異端の宣告を受けました。彼の弟子であったゾイゼは、「神の愛のミンネジンガー」と呼ばれていますが、その精神的な娘であるエルスベート・スタゲルの手によって極めて興味深い生涯の回想が遺されており、神秘的体験の好範例を見ることができます。同じくエックハルトの弟子であるタウラーは、偉大な説教家であり、宗教詩人でありました。ゾイゼが言ったように「ドイツ語の生硬で氷のように冷やかな言葉」で生命ある言葉を表現しようとしたこれらの人々の、ドイツ散文史に与えた功績は、少からぬものがあつたと言えましょう。我国でも一部の宗教家や哲学者は、この分野の研究もしているようですが、文学としてもこれから一層研究されてよいものと思います。

2 ルネサンス・宗教改革・バロック

中世が終って近世の曙が始まります。繁栄したイタリーの町々や、強大な中央集権の国家が発展していったフランスにおいては、この時代の境界に、輝かしいルネサンスという記念碑が打ち立てられました。しかるにドイツにおいては、印刷術が発明された十五世紀の半ばから十八世紀に及ぶ長い一時代の文学は、ただ少数の重要な作家と作品とを持っただけでした。すでにイギリスは、十六世紀の末にシェークスピアを持ち、フランスは、十七世紀において古典主義文学を生みました。ドイツの文学的高揚は、十八世紀まで待たなければなりません。勿論宗教改革は極めて重要な精神的運動でしたが、それは一面ドイツのルネサンスを吸収してしまう力となりました。そして反宗教改革と三十年戦争、あわただしく時は失われてゆきました。極めて少数の例外を除いて、この時代は独自の文学を形成するに至らず、多く諸外国の影響の下に委ねられたのでした。

ヒューマニズム われわれが文化や人間の問題を考えるとき、ヒューマニズムというものを忘れることができません。今日ではヒューマニズムという言葉は、極めて多様な意味に解かれていて、そのためにドイツにはドイツ独特のヒューマニズムがあった、などと言われることがあります。勿論、ヒューマニズムが歴史を持ち、各国によってちがった形態で現われたことは否定できませんが、本末を転倒してはならないと思います。ドイツには独特のヒューマニズムがあった、という立場で初めからそのちがった点にしがみついて、これがドイツのヒューマニズムだと言い張っているよりは、言葉の最初の意味のヒューマニズムがドイツにもあり、それがなぜ強力なものにならなかったのか、どういうふうにしてちがったものになっていったかを考えたほうが、遙かに有意義です。この意味で我国でも、中世末期から近代初期にかけてのドイツのヒューマニズムを研究する人々が出ることは大変望ましいと思います。

1348年、パリ大学に範をとってプラークの大学が創設され、続いてウィーン(1365)、ハイデルベルク(1386)、ケルン(1388)、エルフルト(1392)の諸大学が生まれ、十五世紀になってライプツィヒ(1409)、ロストック(1419)、グライフスワルト(1456)、フライブルク(1457)、バーゼル(1460)、インゴールシュタット(1472)、チュービンゲン(1477)、更にウィッテンベルク(1502)、フランクフルト・アン・デル・オーデル(1506)の九つの大学ができました。これらの大学は、十五世紀のあいだに、人文主義的な関心を深め、古代のテキスト、殊に聖書の原点を究めようと努力し、ついにローマ教会と争うに至るのであります。ルターはウィッテンベルクの大学から出ました。

ドイツのヒューマニズムは、十六世紀初めにおいて、ロイヒリーン(1455-1522)、ウルリヒ・フォン・フッテン(1488-1533)、またフィリップ・シュワルツワルト・メランヒトン(1499-1560)というようなヒューマニストたちによって、力強く発展しました。これらの人々の生活と仕事とは、詳しく調べるに値いする大きな興味をかき立てます。特に、イタリー旅行から古代讚美を持ち帰り、エラスムスに師事し、生涯の終りにあたっては彼の美しいラテン語を捨てドイツ語をもって「ドイツ人よ、手を動かせ！男の心臓を持つものは集まれ！」と叫び、宗教改革運動に身を投じようとした騎士の末葉フッテンの悲劇が、そうであります。また、熱狂的な回宗者ペッフアーコルンが、旧約を除く一切のギリシャ文献を焚書すべきことを主張したために、これに反対して起されたドイツのヒューマニストたちの運動、或いはドイツのヒューマニストたちとエラスムスとの関係、ドイツ・ヒューマニズムは、劇的な経緯に富んでいます。ツヴァイクの『エラスムス』、C・F・マイヤーの叙事詩『フッテン最後の日』などは、この時代の動きの一面を伝えている作品です。しかし、ドイツにおいては、古典の認識は直ちに新しい文学の創造につづかないで、宗教改革の問題とつながったのでした。

宗教改革期 1517年ルターによって開始された宗教改革運動以来、文学は信仰の侍女となりました。しかし、ルター(1483-1546)は、ドイツ語及びドイツ文学に極めて大きな影響を与えた人物であります。彼自身一個のヒューマニストでありましたが、宗教的真理に到達するために古代を学びました。ルターは、聖書を民衆に知らせるために、

近代ドイツ語をつくり、数多い方言を統一的な言語にもたらしめました。彼はドイツ語を熱愛し、聖書の翻訳のために民衆の言葉を非常な苦心をもって学びました。『翻訳についての送り文』は、そのことを告げています。彼は「家庭内の母、街上の子供、市場の普通人」の言葉を聞いたのであります。ルターはまた、民衆の心に染み入るような力強い言葉をもって、宗教歌を更新しました。また、説教者や布教パンフレットの作者としての彼の文学的業績も、見逃すことができないであります。

ルターとならんでハンス・ザクス(1496-1576)が、この時代の輝かしい、最もいきいきとした存在です。アウグスブルクの宣言(1555)によって完成した宗教改革と、次の時代の反宗教改革とのあいだに、ドイツの文学は神学的論争に倦み、リアリズムを指向しました。大体十六世紀初頭はドイツ市民階級の最初の進出が頂点に達した時期で、彼らの現世謳歌の心情、いわゆる「酒と接吻」に代表される物質的生活の肯定が、謝肉祭劇等の形の下に、一種逞しく歌い出されたのでした。ザクスの天才はそれを見事に表現しています。ニュルンベルクの靴屋であった彼は、その一生において作った靴の数よりも作品の数のほうが多かった、と言われていています。彼は職匠詩人の最後の完成者として、4275篇の詩をつくりました。しかし、彼は笑劇・謝肉祭劇・喜劇・宗教劇等の作家としていっそう興味があります。それらには現実に対する観察力、素朴だが力強い表現、天真爛漫な諧謔、がみちあふれています。ドイツ市民劇、或いは市民文学で、この強力な代表者のあとを継ぐものがなかったのは、歴史的制約があったとはいいながら、いかにも残念なことであります。こうした仮定は無意味ですが、もしこの方向が深く強く展開されたならば、ドイツの文学は変わったものになったかもしれない、と思われるくらいです。この時代に属する作家として、シュトラースブルクのフィッシャルト(1545頃-1591)があります。彼は大衆的な作品を改作したり(『ティル・オイレンシュピーゲル』)、自分の流儀で外国の作品を翻訳しました(『ガルガンチュワ物語』)。彼の代表作は『幸運の船』(1576)ですが、シュトラースブルクの射撃祭に参加するチューリヒ人の旅物語であります。彼は喜劇的、諷刺的作家として才能が豊かにあり、法律学者で神学者でしたが、このドイツのラブレールは、いささか冗漫で誇張に失する欠点がありました。

バロック文学 十七世紀のドイツ文学は、フランス、イタリー、スペイン、イギリスの影響、少しく荒々しかった宗教改革時代の文学の洗練化、そして大衆の心を捉えようとする反宗教改革の文学的反映、等の特徴とします。バロックというのは、元来美術史上の用語ですが、イタリーやフランスのような古典主義を生み得なかったドイツにおいては、古典主義ということは言い得ないので、この名が用いられるようになりました。造型美術の場合のように、バロック文学もまた、過度の装飾、明晰な形式を欠いた激しい運動、矛盾や対立を愛好する傾向、といったものを特徴とします。この世紀の文学は、国家の分裂と三十年戦争(1618 - 48)とによって発展を妨げられたのでした。そして戦争の被害の少かったシレジアに、新しい文学は生まれました。

オーピッツ(1597-1639)は、この流派の先頭に立つ人物で、フランスのロンサールトマレルブの讚美者であり、古代の作品を翻訳し、高踏派的詩人として『ドイツ詩論』を書きました。彼の弟子であるライプツィヒのパウル・フレミング(1609-1640)は、オーピッツ派の最も才能ある詩人でしたが、夭折しました。アンドレアス・グリュフィウス(1616-1664)は、十三カ国語を知っていたと伝えられるような博学家で厳格なルター派の堅信者でしたが、フランス劇の三統一の法則、ギリシャ劇の合唱を借りて、一種のペシミズムの味わいを含んだバロック劇を書きました。悲劇『レオ・アルメーニウス』『カルデリオとツェリンデ』等のほか、いくつかの喜劇を書いています。後期シレジア派の詩人たちは、前期のその諸傾向を誇張したゆきかたをしました。今日、この世紀六、七十年代の巨星であったホフマン・フォン・ホフマンワルスダウ(1618-1879)を読む人は少いでしょうし、ギュンター(1695-1723)は、自己の才能を完成しないで夭折しました。

十七世紀に再び独逸神秘主義の系譜が、開花しました。ヤーコブ・ベーメの深遠な、接神論、『鶯との声くらべ』の著者であるカトリック詩人フリードリヒ・シュペー(1591-1635)、その後継者アンゲルス・ジレジウス、(本名ヨハネス・シェフラー)

(1624-1677)であります。ジレジウスはプロテスタントから回宗したフランチェスコ派の僧侶で、六書、1675 句の『ケルビンのなすらい人』によってドイツ文学に一風変わった贈物をしています。彼の神人冥合の思想は、後の敬虔派、更にはノヴァーリスに影響を与え、忘れられぬ存在であります。一方、プロタンティズムも、パウル・ゲルハルト(1607 - 76)を生み、その賛美歌はルターについて、しかも宗教的感情を個人化して、真に一個の詩人として創作されたものであります。ヨハン・セバスティアン・バッハはその詩を作曲しております。

バロックの小説は詩に比べて貧弱に見えますが、スペインのケベードや悪者小説の影響を受け、モッシュロッシュ(1601-1669)の社会諷刺小説『ピランデル・フォン・ジツテワルトの奇妙かつ正銘の幻想』(1642)やグリーンメルスハウゼン(1625-1676)の『ジンプリチムスの冒険』(1669)を生みました。後者は、捨てられ、百姓に養われた全く無知の少年ジンプレクスが、世の波瀾を体験し、ついに隠者として魂の平和を見出すまでの経緯を描いた冒険物語であって、『パルチファル』につぐ第二のドイツ教養小説とされています。荒唐無稽の奇語放談も交えられていますが、三十年戦争時代の世態風俗を活写し、ドイツ文学史上の最も重要な作品のひとつに数えられています。

バロック時代の文学は、浮薄なアナクレオン模倣や残虐誇張の趣味と信仰が、偉大さに達することなく雑然と混淆しています。それは、他のヨーロッパ諸国に比して著しい後進性をもって、次の世紀を迎えなければなりませんでした。

3 啓蒙時代

十八世紀ドイツ文学 十八世紀後半になって始めて、ドイツは文字通り近代的な、そして真に国民的な文学を確立することができました。近代的といった意味は、近代的自我の諸性格を具えた文学が生れたということです。大分前の話ですが、ドイツの或る学者が、われわれ現代人はどのくらいの時代まで遡ってドイツ文学をそのあるがままの姿で直接的に理解できるか、という問題を考えてみました。そして、現代人はゲーテとシラーとを、本質的には、彼らの同時代人と同じように理解できる。更にもう少し遡ってクロップシュトックくらいまでは、直接的にわれわれに語りかけてくるが、それより以前の文学は、そういう意味ではもはや理解できない、としました。確かに一面の真実を捉えた見かたであると思われまふ。十八世紀半ばにおけるドイツの精神史或いはドイツ文化発達史上のエポックは、中世と近世とのあいだに置かれる大転機に劣らぬ意味を持っています。

またそれは同時に、ドイツにおける国民的な文学の確立の時代でもありました。次の興味ある数字がその事実の一端を裏書きしているように思われます。ドイツ語で印刷された書物は、1570 年においては印刷書全体の 30 パーセントにすぎなかったのが、1681 年からは半数を超え、1730 年には 70 パーセント、1799 年にはついに 99 パーセントに達したそうであります。政治的事情からいっても、新教のプロシヤ王国が旧教のオーストリー帝国を凌駕し始めたことも、ドイツの詩人や作家にどんなにか影響を与えたことでしょう。

そしてこの時代に市民階級がともかくも目ざましい進出をとげ、新しい文学の担い手となろうとします。文学が万人のものとなる道を取りはじめたのです。中世末期から近世の初めにかけて、第一回の市民階級の進出期がありました。十三世紀にはライン都市同盟やハンザ同盟が生れ、通商の実権を握った市民階級の力は伸長しました。しかしそのような実力者の数は少く、しかも彼らの富は結局、諸侯の懐に流れ込むことをまぬかれず、市民階級は階級全体としての意識には到達し得ませんでした。そして三十年戦争の動乱は、この動向を阻止し、没落しつつあった騎士階級に絶好の復活のチャンスを与える結果となってしまいました。しかるに、十七世紀から十八世紀初めにかけて市民階級は、ヨーロッパ全体の気運、殊にイギリスの数次にわたる階級的革新、また啓蒙的思潮に促されて、第二回目進出を行います。もっともそれは、ドイツの国情のために、かならずしもはかばかしくは歩みを進めることができませんでした。フランスなどとは異なり、ドイツの絶対君主制は、分立した諸国の割拠の形をとったため、市民の意識はせせこましく、重苦しい状態のうちに停滞し、革命というような大きなエネルギーに凝

集することはできなかつたわけです。それがドイツの発展の後れと呼ばれるものであり、ドイツ文学の発展にも大きな影響を及ぼしているわけですが、著しいいくつかの努力の跡を見ることによって、われわれは近代文学の成立を辿ることができます。この屈曲の多い歩みはまた、精しく研究する価値のあるところでしょう。

ロココ文学 十八世紀前半の文学は、大勢として十七世紀バロック文学の延長であったと言えます。フランスのルイ十五世時代の芸術様式はロココと呼ばれていますが、この時代のドイツ文学も、ふつうにはロココ的なものとして規定することができます。優雅・装飾・感覚的愉楽等を特徴とするこの様式は、当代のアナクレオン詩風によって代表されるものでした。

ゴットシェット(1700-1766)は、フランス趣味の最後の擁護者として、『修辞学』や『詩学』を書き、詩人の従うべき規則を示し、特に演劇においてはフランス古典劇の厳格な形式を主張しました。彼はまた実作家として悲劇『死にゆくカトー』等を書きましたが、この古典主義的な理論家は、民衆一般の心情からは遊離し、若い詩人たちの反発を招きました。スイス派の学者ボードマー、ブライティンガー等はイギリス詩、特にミルトンを掲げてゴットシェットに反対しました。また「ブレーメン論叢」に拠った若い世代も同じく彼に対立しましたが、そのうち最も才能あったゲレルト(1715-1769)は、讚美歌やラ・フォンテーヌ風の寓話文学の作者として知られています。そのほかこの時代の詩人として、イギリス詩の影響を受けたプロッケス、ハーゲドルン、ハラー、アナクレオン派のグライム、ウーツ、戦争と牧歌の詩人エトヴァルト・フォン・クライスト等があります。

ロココ文学の完成者はウィーラント(1732-1813)であります。彼はフランス文学の影響を受け、古代を讚美するとともにシェークスピアの翻訳者でもあり、そのような雑多の諸要素を身につけ、中道主義者でエピキュリアンであり、都雅と寛容との趣味の所有者でありました。小説『アーガトン』(1767)は、ギリシャに取材した、教養小説の系譜に数えられる作品です。また叙事詩『オーベロン』(1780)が知られていますが、そこにはロココ的装飾がどんなものであるかという実例を見ることができます。ウィーラントは影響力ある雑誌「ドイツ・メルクール」を創刊しましたが、彼は別に一定の流派を立てず、悠々と長い生涯を歩み、最後にはドイツ古典主義の一翼に立ったのでした。

少し前後しますが、この時代にイギリス小説がドイツに浸透し始めました。『ロビンソン・クルーソー』に倣ったいわゆる《ロビンソンナーデ》のドイツにおける最も成功した作品は、ヨハン・ゴットフリート・シュナーベル(1692-1750)の『フェルゼンベルク島』(1731)であります。それは一人の女性とその夫を含む三人の男がひとつの島に漂着し、波瀾の後に一組の男女が残り、子孫を増して栄えるという物語であります。またゲレルトの『スエーデンの G 伯夫人の生涯』(1748)は、リチャードソン流の道德小説のドイツ版であります。これらの小説において、前代のバロックが激情的であり、また個我中心的で政略的に行動したのに対して、十八世紀に入ってから新しいタイプの人間が生れ、いわゆる感じ易い性格とか、「美德」によって人と人との関係を協調させてゆこうとする考えかたが、出て来たことを知り得ます。しかしそれらの感情がもっと主観的な高揚を示すためには、70年代の疾風怒濤の時代を待たなければなりません。

啓蒙主義 ロココ文学は多分に啓蒙思潮の洗礼を受けていたので、それとこれとはひとつの時代の両面の現われと見られましようが、この時代の哲学のうちには際立った啓蒙思想がみられます。フランスのデカルトから発し、仲介者ライプニッツとその弟子ヴォルフとによって伝えられた合理主義と、イギリスのヒューム、ロック、バークレーの感覚論とが、この時代に合流し、やがてカントを生み、ドイツにおける精神の解放を準備します。ドイツの思想は次第に伝統的な神学から離れて、近代人の形成を促してゆくのです。そのみならず、レッシングの出現から約一世紀、およそ1750年から1850年に至るあいだにおいて、「ドイツ精神の世紀」と呼ぶにふさわしい偉大な飛躍を、ドイツ精神はヨーロッパの精神界において示したのであります。

啓蒙時代の第一人者は、レッシング(1729-1781)です。彼はゴットシェットとフラン

ス文学から離れ、イギリスのリロの市民劇に学び、またシェークスピアを讃美しました。彼以後フランス古典劇は過小なくらいドイツにおいては貶[おと]しめられる結果になりました。ドイツにおける市民悲劇の最初の作品である『サラ・サンプソン嬢』(1755)、ドイツ三代悲劇に数えられる『ミンナ・フォン・バルンヘルム』(1767)、悲劇『エミリア・ガロッチィ』(1772)、そして最後に宗教的寛容を説いた哲学的韻文戯曲『賢者ナターン』(1779)等の実作によって、ドイツ演劇を国民的な方向に導いたのでした。彼はおそらく今日も舞台上で演ぜられる最古のドイツ作家でありましょう。彼はまた、批評家として一流の才能であり、フランス古典劇を攻撃して新演劇の端緒を開いた『ハンブルグ演劇論』(1767 - 68)、絵画と文学との限界を論じた大作『ラオコーン』(1766)、人間の進歩の要件としての教育を論じた『人類の教育』(1780)等があります。

ほかに啓蒙家として挙げるべきものに、一切の精神的宗教に対する懐疑を投げたユダヤ人哲学者メンデルスゾーン(1729-1799)と、ゲッティンゲン大学自然科学教授であったリヒテンベルク(1742-799)とがあります。前者には『哲学的対話』の著があり、後者は後年ニーチェによってドイツ散文の巨匠の一人として遇せられた興味あるアフォリズムを遺しております。

敬虔主義 啓蒙主義が大きな勢いでドイツに拡がって人間を神学から解放するあいだに、根深い、極めてドイツ的なひとつの精神的運動が、表面に出て来ました。それは特に、ドイツ文学史にとって意味深いものであります。啓蒙主義の合理主義によって抑圧された感傷的主観主義が、満されない宗教的欲求にかられて、敬虔主義となって爆発するのです。ヤーコブ・ベーメや薔薇十字会に始まった神秘的瞑想の流れが、シュペナーの「敬虔なる信者の仲間」の運動や、ツィンツェンドルフのヘレンフト派に結集しました。この個人主義的な感情を重んずる思想は、ドイツ人一般の心理に本来的に訴えるものを持ち、それを文学の領域に持ち込むだけで次の《疾風怒濤》の大運動に点火するに充分でした。

敬虔主義と主観主義との文学的代表者は、クロップシュトック(1724-1803)であります。彼の『頌歌』(1771)は、十八世紀の試作品における最大の記念碑でありました。彼が1748年「詩を頌[ほ]める歌」において、愛人を自分の手に入れようとして情熱的な主観を吐露したとき、当代の最も進歩的な批評家であるはずのレッシングすら、「このように真面目になってひとりの女をねがうのは、何と本姓を失ったことだろう」と評したくらいで、いかに空前の主観的な表白であったかがわかります。彼はまた二十歌より成る宗教的大叙事詩『救世主』(1746 - 73)を創りました。これはミルトンの『失樂園』と同じように、広く一般に尊敬されてはおりますものの、今日では全巻を通読する人は少いと思われませんが、最初に書かれたその第三歌まででも、十分に詩人としての彼の位置を察せしめるものがありましょう。彼は感傷性の過剰を大きな欠点としていますが、真に国民的な愛国詩人で、当時の青年婦女子に与えた影響の大きさは、『ウェルテル』中に見られる叙述にも分るとおりです。

啓蒙時代の文学は、このように、戯曲におけるレッシング、小説におけるウィーラント、詩におけるクロップシュトックによって、絶頂に達しました。十八世紀の四分の三を経て、ドイツ文学史上の輝かしい飛躍である「シュトルム・ウント・ドラング」が始まります。またそれは、1800年を中心に約半世紀の、いわゆる「ゲーテ時代」の開始を意味します。

4 シュトルム・ウント・ドラング

1750年の世代 人間を愚昧から解放して世界の中心に置いた面での啓蒙主義と、個人主義的感傷主義に没入した敬虔主義と、この二つの流れは合して、1770年頃のドイツにひとつの文学革命が爆発します。この運動はその後十年ほど続き、およそ1750年前後に生れた人々の天才性を触発して、始めて真に国民的な文学を確立したのでした。この運動には、この派の劇作家クリンガーの戯曲『シュトルム・ウント・ドラング』の名が冠せられますが、それは「嵐と迫り」という意味であって、その戦闘的な原語の響き

は外国語には翻訳し難いものです。成瀬無極氏はこれを「疾風怒涛」と名訳しました。

この運動には「自然に帰れ」と叫んで善き野蛮さというものの福音を唱えたジャン・ジャック・ルソーの思想と、スピノザの汎神論が強い影響を与えています。啓蒙思潮の見出した理性の優位というものは、この時期において感情と空想との優位に、とって代られます。そして人間のうちなるデモーニッシュなものが限りなく吐露されて、巨人主義となります。この無限の主観主義の高揚は、既成の一切の権威と秩序とに反抗します。『群盗』や『ゲッツ』のような社会に対する反抗、ゲーテの詩『プロメトイース』のような宗教に対する反抗、シラーの『フィエスコの謀反』、『ドン・カルロス』のような国家に対する反抗、『ウェルテル』や『たくみと恋』のような社会的因襲に対する反抗、それらはこのことを示しております。芸術家は、本能によって動く造化神にも似た天才を讃美し、フランス古典主義の形式を排し、ホーマー、シェークスピア、オシアンに従い、奔放な形式によって真の感情と真の自然とを表現しようとし、そして素朴で率直な民衆の声を尊重して、そうした文学に高い価値を見出したのでした。

二人の指導者 この運動は北方の周辺から起りました。ヨハン・ゲオルク・ハーマン(1730-1788)は、深くキリスト教的な主情的な人物で、この運動の先覚者となりました。彼はその著作よりも手紙や人格によって、より多くの影響力を持ちました。彼によって書かれたものは断片的で、予言にみちた謎めいた言葉ばかりであり、そのため《北方の魔術師[マグス]》の異名をとりました。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー(1744-1803)は、ハーマンの予言を体系化し、この運動の指導者となりました。彼自身の詩作は意味が少いのですが、その理論的指導力によって占める位置は、極めて大なるものがあります。彼もレッシングと同様、源始の民衆の根源的な詩を尊重し、そこに文学の生命の源泉を見ました。そして『歌謡における諸民族の声』(1879)を集めました。また彼は歴史哲学の領域において、大きな意味を持ちます。彼は、カントのように歴史の理想的窮極目的を人類の理性的秩序には見ず、諸民族の各時代における独自の力と個性的な文化の発展に歴史の意味を認め、今日に至るまで大きな影響力を持っております。この方面の代表作は未完の大作『人類歴史哲学考』(1784-1791)であります。しかし特に意味が大きいのは、1771年シュトラースブルク遊学中のゲーテとの出会いであります。三歳年長のヘルダーはその師傳としてゲーテの天才に火を点じました。

ゲーテの周辺 ヘルダー、ゲーテをめぐってシュトラースブルクは、この運動の中心地となります。マクシミリアン・クリンガー(1752-1831)は最も多作でかつ過激でした。『疾風怒涛』(1777)、アントン・ライゼウィッツ(1752-1806)の『タレントのユーリウス』(1776)と懸賞で覇を争った、兄弟の角逐を描いた『双生児』(1776)等がありますが、彼は次第に平静な境地に移り、後にロシアの宮廷に仕えて輝かしい生涯を持ちました。レオポルト・ワグナー(1746-1779)は、グレートヒェン悲劇と関係ある『嬰兒殺し』(1776)によって知られております。この仲間の特異な天分があったのはラインホルト・レンツ(1751-1792)で、『家庭教師』(1774)、『兵士たち』(1776)を書きましたが、モスクーにおいて狂死しました。最後に画家ミュラーと通称されるフリードリヒ・ミュラー(1749-1825)は『ゲッツ』を模倣した『ゲノフェーア』(1776)、また牧歌的詩作によって知られております。彼の作った「兵士の別れ」の歌は、ドイツ人の誰もが知っております。

若いシラー ゲーテのワイマルへの出発を境に静まりかけたこの運動を挽回したのは、フリードリヒ・シラー(1759-1805)であります。彼とともにこの運動はシュワーベンに伸展しました。若いシラーはその青春の七年間をヴュルテンベルクのカール・オイゲン公のカール兵学校に過しましたが、詩人シューベルトが「奴隷の工場」と呼んだこの学院の厳格な規律と階級的差別とは、彼の病的なほどの空想力を刺戟したのでした。彼は学院とともにシュトゥットガルトに移り、そこにはオイゲン公が大学を創立しようとして学者を集めたため、古典とシェークスピアとそして新時代の文学を識ることができ、最初の詩作意欲を燃え上がらせられたのでした。医学部に転じてからも『群盗』に着手し、シュトゥットガルトで軍医となって1780年1782年にこの作品はマンハイムで初演

されました。ドイツの青年は主人公カール・モールの自由に共感の拍手を送りました。しかし二度も許可なくマンハイムに赴いたため、重禁錮の処罰を受け、獄中で『フィエスコの謀反』のプランを書きますが、執筆を禁じられて、そこを脱走してマンハイムの劇場監督の許に逃れます。しかしその監督はオイゲン公との摩擦を恐れ、完成改作した『フィエスコ』(1783)をも斥けます。次に学友の母たるヴォルツォーゲン夫人の別荘に比較的長く滞在し、『たくみと恋』(1784)を書き、この作品によってシラーは新たな勝利を収めました。マンハイムに戻った彼は、病気と貧困と。そしてシャルロッテ・フォン・カルプとの不幸な恋愛とを体験します。1785年、友人ケルナーの招きでライプツィヒとドレスデンとに向って出発するとともに、《疾風怒濤》は終りを告げます。そこで完成した『ドン・カルロス』(1787)は、自由の讃歌としてこの運動の精神につながってはおりますが、韻文形式をとり、すでに次代への過渡を示しております。

ゲッティンゲン林苑同盟 《疾風怒濤》がドイツ南西部で発展しているあいだに、ゲッティンゲンに詩人のグループが出来上りました。《ゲッティンゲン林苑同盟[ハイムブント]》と呼ばれ、クロップシュトックの影響下に、市民的感傷主義を歌い上げました。ヨハン・ハインリヒ・フォス(1751-1826)はその代表作『ルイーゼ』(1784)によって家庭の幸福を讃えましたが、その『オディッセ』(1781)と『イリアード』(1793)とは、独訳の定本とされる名訳であり、例のレクラム文庫にも収められております。詩人としては、物語詩『レオノーレ』(1773)の作者で革命的な天稟ある民衆詩人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー(1747-1794)、憂鬱な哀歌詩人ルードウィヒ・ヘルティ(1748-1776)、そしてこの派の同類者でハンブルクにおいて活躍した、民謡的な率直な詩人マテアス・クラウディウス(1740-1815)がありました。クラウディウスの詩は今日再び取り上げられることが多いようで、注意すべきであります。

5 古典主義

新ヒューマニズム 《疾風怒濤》は国民文学運動として、爆発的に短期間、いわゆる《天才の時代》を謳歌しましたが、その急激な膨張と過度とは、新たな規範によって矯正され、収縮されねばなりません。それが古典主義であります。そしてその古典主義は古代ギリシャ・ローマに範をとりましたが、ここで期せずして、ヨーロッパ精神界においてひとつの重要な役割を演ずることになりました。社交的洗煉の具に墮し、いたずらに古代模倣の形式的存在になり果てようとしていた西欧ヒューマニズムの伝統が、ここで新たな生命によって蘇えられ、救われたからであります。ドイツにおける新ヒューマニズムは、ヒューマニズムを近代的意識において再認識しました。実際は古典主義という流派はありません。それはむしろ当時の精神的雰囲気であります。そしてそれを築き上げた人々は、前代の《啓蒙》と《疾風怒濤》との同じ人々であり、彼らは前者の合理主義と後者の主観主義とを総合しようとしたのでした。

1755年、ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン(1717-1768)のローマへの旅立ちは、新ヒューマニズムの出発でした。この美術史家は『絵画及び彫刻におけるギリシャ諸作品の模倣についての考察』(1755)、『古代芸術史』(1764)の両者によって、ドイツの美術よりも文芸に、深い影響力を持ちました。古代芸術に与えた有名な《高貴な単純さと静かな偉大さ》という公式によってであります。レッシングもまた古代芸術を研究し、『ラオコーン』(1766)と『古代人はいかに死を形象化したか』(1769)を書きましたが、また文化と教養との理念を『人類の教育』(1780)によって表明しました。これはヘルダーの『人間の進歩のための書簡』(1792-94)と呼応し、当代の古典主義的人間観を示しております。ヴィーラントも、その古代に取材した小説によって、アレキサンドラン的ギリシャの讃美に耽ります。カール・フィリップ・モーリッツ(1757-1793)は、始め敬虔主義に没頭しておりましたが、次にイタリーに旅行、そこでゲーテと交わり、『美の芸術的模倣についての論考』(1788)、『ギリシャ神話研究』(1791)によって、古代芸術の秩序と節度とを讃美しております。彼の精神的自伝『アントン・ライザー』(1785-90)は、一種の教養小説として、文学史上に特異な位置を占めております。ウィルヘルム・フォン・フンボルト(1767-1835)は、外交官・政治家・教育者、そして言語学者でありまし

たが、ギリシャの古典に養われた深いヒューマニズムの信奉者でありました。ウィルヘルム・ハインゼ(1746-1803)は、ルソーの弟子として《疾風怒濤》に出発しますが、イタリーに旅行しヘラス人となろうと試み、『アルディンゲロ』(1785)において、ギリシャの夢とイタリー・ルネサンスに対する熱中とを表白しております。

ゲーテとシラー 古典主義は詩人としては、ゲーテとシラーとの一対に帰します。ゲーテはイタリー旅行によって、シラーはカントの哲学によって、すでに古典主義への道を見出していました。1794年から1805年に至る十年の両詩人の交友は、この本来資質を異にする二人を協力せしめて、普遍的人間性につらなる高い文学を形成したのでした。ゲーテについては次節において見ますが、シラーの古典主義者として歩んだ道をここに辿ってみましょう。ゲーテが人間的発展を遂げているあいだ、シラーは学問的研究によってそれと平行した発展の道を歩みました。まず彼は1789年からイエナ大学の歴史学講座を担当しますが、この前後に『ネーデルランド離反史』(1788)、『三十年戦争史』(93)の両著を書きました。そしてカント哲学の徹底的研究によって美学理論を樹立します。『人間の美的教育についての書簡』(1794)は、芸術を人間性を高める手段と認めております。また芸術を「遊戯衝動」と見たことも、有名な点であります。彼もまたギリシャを研究し、『素朴的、及び情感的文学について』(1795)によって、ギリシャの詩と当代の詩を比較しましたが、それはまたゲーテと自己との対照を意識していたのでした。これは、文学理論にとって忘れられぬ著作のひとつとしての権利を持っております。

彼は理論家としてばかりでなく、実作家としても活躍します。理念的な高貴な詩を多数遺しておりますが、特に悲劇作者としてドイツ演劇に君臨したのでした。『ワレンシュタイン』(1800)、『マリー・スチュアート』(1801)、『オルレアン処女』(1802)は、いずれも大作で、シラー的理想主義に色どられています。初期に比して著しく感性と知性とのバランスに到達した円熟を示しております。『メシナの花嫁』(1803)は、合唱を使用し、ギリシャの運命悲劇に範をとっております。『ウィルヘルム・テル』(1805)は、テルをめぐる民衆全体の自由への渴望を表現し、国民叙事詩的な偉大さに達しております。

シラーは、そのゲーテとの学問的交渉、共同詩作、雑誌の共同刊行、劇場での協力、等によって、ドイツ文学の黄金時代を築き上げました。その協力と互いの刺戟との意味は、極めて大なるものがあります。両詩人のあいだには多くの貴重な往復書簡が遺されております。シラーの研究文献には新関良三氏『シラーと希臘悲劇』(東京堂)があります。

二人の孤立者 ここで二人の孤立した大きな存在を挙げなければなりません。詩におけるヘルダーリン、小説におけるジャン・パウルであります。彼らは理想に没頭して現実を超越しようとした点において、しばしばロマン主義の先駆者として取り扱われます。しかし彼らの抱いた理想的人間はまさしく古典主義的風土に含まれるべきものがありますので、ここに位置づけることもあながち誤りではないと考えます。もっともこの二人と、更にクライストとは、文学史の分類のうえで常に動揺しております。最近の或る文学史では「反古典主義」文学という区分を試みてこの三人を収めているのがあります。

フリードリヒ・ヘルダーリン(1770-1843)は、孤立した予言者的詩人であります。彼はチュービンゲン大学でヘーゲル、シェリングと交わり、プラトン、スピノザ、カントを学びましたが、シラーの推薦でワイマル、イエナの文学的環境に入りました。彼が家庭教師となったフランクフルトの銀行家ゴンタルト家で、其処の夫人ズーゼッテと精神的相愛の関係を持ったことは、彼の生涯における最も重要な体験で、詩人はそのディオテマによって、この女性を不滅たらしめております。『ヒューペリオン』(1799)は書簡体小説で、十八世紀ギリシャの一青年がその生涯を回想する形式をとっておりますが、生命のリズムを伝える大散文詩となっております。そのほか断片悲劇『エンペドクレス』、数々の讃歌(「多島海」「パンと酒」)において、終始、理想的ギリシャ像の世界に住み、高邁な心情を失った祖国を呪いながらも、ギリシャ精神による祖国の再生を祈念したのでした。1800年頃から次第に狂気に沈みましたが、(狂える彼が白い帽子を被

って不安げに出没する姿は、メーリケの詩作「火の騎者」として描かれております)彼の詩の価値は後代によっていよいよ認められるようになりました。ドイツ近代詩が彼より受けたものは、極めて大であります。彼はニーチェに先立って、ディオニソスのギリシャを発見したのです。ここにドイツ人のギリシャ像の一典型があります。極めて調子の高い彼の詩は、情感を意志によって集中するドイツ詩の、極地のひとつを示すものであります。

ジャン・パウルの名で知られているフリードリヒ・リヒター(1763-1825)も、極めて感受性の豊かな古典的作家でした。かれはいっそう伸々と、そして長々と自然への愛好をその小説において表現しております。非常に多作で、現代の私たちにとっては難解な言葉と退屈なほどの冗漫さで書き綴りましたが、当時の読者層には彼らの心情の最もよい表現として、広く愛好されました。また後代への影響力も大きく、現代においてその価値は再認識されつつあるようです。彼はイギリスのスイフト、スターン、ドイツのリヒテンベルク、フランスのルソーから、文学上・思想上の影響を受けました。『ウーツ先生』(1790)のごときは、平和で牧歌的な市民の典型として、しばしば引用もされる人間像であります。『見えない普請小舎』(1793)『宵の明星』(1795)は、感受性とユーモアとの混じり合いにおいて、彼のいわゆる《高尚、或いは荘厳な人間》を表現しており、代表作は『巨人』(1803)と『生意気ざかり』(1805)で、ほとんど脈絡を欠いた構成と数多い挿入部分とによって悠々と叙述の筆を楽しんでおります。その音楽的な調子と豊かな空想力とは、今後ますます再認識されることでしょう。文学論として『美学入門』(1804)があります。

6 ゲーテ(1749-1832)

イタリアのダンテ、イギリスのシェークスピアがそれぞれの国の文学を代表するように、ゲーテはドイツの文学を代表します。そして彼はその詩作によってばかりでなく、その人生を一箇の作品としました。しかも彼の生涯は、一時代全体の縮図の感があります。今日ではゲーテに対する批判もさまざまあるわけですが、私たちがドイツ文学を考えるとき、いな、人間性そのものを考えるとき、彼の生涯と作品とは、なお与えるべき多くのものを持っているように思われます。

若いゲーテ マイン河畔フランクフルトの素封家に生れたヨハン・ウルフガングは、十七歳で法律を学ぶためライプツィヒに遊学しましたが、そこの三年の生活で文学の眼を開かれ、『恋人のむら気』『同罪者』の両戯曲、および多くの詩を書きました。しかし、まだ当時のロココ文学を反映しております。帰郷して大病の後、1770年から一年半シュトラースブルクに滞在し、そこで重要な体験をします。そのひとつはヘルダーと出会い、新文学の方向を教えられたことであり、第二にはフリーデリケ・ブリオンとの恋愛であります。そしてこの女性をめぐる詩群は、ゲーテの新しい出発、そしてドイツ近代詩の誕生を意味しております。得業士となったゲーテはフランクフルトに戻り、1772年の夏をヴェツラーにおいて法律実習のために過しました。このあいだに有名なあのロッテ、すなわちシャルロッテ・ブフへの愛を体験します。そのために逃れてフランクフルトに戻ってからのゲーテは、真に《疾風怒濤》の代表者となりました。『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(1773)、『クラヴィーゴ』(74)の両戯曲、小説『若きウェルテルの悩み』(74)を発表し、『マホメット』『プロメーテイス』『ファウスト』の諸断片の構想が企画されました。ドイツのシェークスピアと喝采された『ゲッツ』と、いわゆるウェルテル病をヨーロッパ各国に蔓延せしめたこの永遠の小説との成功は、ゲーテの文名を一躍高からしめました。この時期の作品のいずれにも積極的、或いは消極的に、若いゲーテの激しい革命的志向が充実して表現されております。また『プロメーテイス』『ガニメート』『マホメットの歌』等によって、新しい主題と韻律と形式とをドイツの詩に与えたのです。

完成期のゲーテ 巨人主義に対する没頭は、ひとつの決定的契機によって終止符を打たれます。若いカール・アウグスト公がワイマルにゲーテを招いたからであります。公

の友人であった若い詩人は、次第に国政にあずかるようになり、ついには大臣の要職につきまします。そしてこのような現実との接触は、人間としての彼を深化します。また職務上の必要からも科学研究を企て、地理学・鉱物学・植物学・解剖学等に専念します。有名な顎間骨の発見は、1784年のことでした。そしてシュタイン夫人に対する愛は、彼のデーモニズムを鎮静し、新しい芸術様式を用意したのです。ワイマルにおける最初の十年は過渡の時代として、詩人は忍耐強く成熟を待っておりました。『シュテラ』(1776)は、不倫のゆえをもってスキャンダルを起しました。職務に疲れ、シュタイン夫人との愛にも厭きたゲーテは、1786年秋ローマに逃れて行きます。ゲーテがブレンネル峠を越えたときは、ドイツの精神史にとって記念すべき大きな転機でありました。

88年の夏までの二年間のイタリー旅行において、ゲーテは古典主義者になります。彼は南方の豊かな官能性を発見し、根源植物のイデー、ひいては万物のメタモルフォーズのイデーを着想し、古典美の形式を体得して、ワイマルに戻ります。晩年に書いた『イタリー紀行』は、いわゆる「真の人」となるゲーテを如実に示しております。ローマにおいて完成した『エグモント』(1787)、イタリー旅行中に韻文に改めた『タウリス島のイフィゲーニエ』(86)、帰郷後の『トルクワートー・タッソー』(89)、『ローマ悲歌』(90)も、その成果と言えます。しかし88年、身分の低い23歳の娘クリスチアーネ・ヴルピウスとの内縁関係の開始は、スキャンダルをまき起しました。内面的孤独と多忙とのうちに、フランス大革命に続く92年のフランス出征、93年のマインツ包囲戦争従軍に至ります。93年には叙事詩『マイネケ狐』が書かれました。

1794年7月、イエナの自然科学会でシラーと同席、その帰途長く議論してから、この両巨星は固い友情で結ばれることとなりました。そしてそれによりゲーテの文学的活動は再び活発となります。『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』(95)、叙事詩『ヘルマンとドロテア』(97)、そして何よりも『ファウスト』は着々と進行します。ところが1805年シラーの死去は、ゲーテに深い悲しみを与えました。

晩年のゲーテ シラーが死んでゲーテは再び孤独です。しかし彼はもはや単に詩人ではなく、ひとりの晴朗な思想家であり、《ワイマルの賢者》であります。1808年はゲーテの生涯にとって重要な事件が二つありました。ひとつはエルフルトにおけるナポレオンとの会見で、ゲーテはこの思い出を生涯胸に秘めておりました。『エッカーマンとの対話』などにそれを見ることが出来ます。もうひとつは『ファウスト』第一部の発表であります。60歳に達した彼は、なお多作で悠々と生き続けます。依然として自然科学の研究を続け、『色彩論』(1910)を完成します。ゲーテにおける自然科学研究はひとつの重要なテーマでありましょう。自伝作品として『詩と真実』(1811-14、第四部は死後公刊)、『イタリー旅行』(16-17)、『対仏陣中記』(22)、文学作品として数多くの詩、特にマリアンネ・フォン・ヴィレメルとの愛より生れたペルシャ的神秘主義の書『西東詩篇』(1819)、17歳の少女ウルリーケ・レヴェツォーに対する愛と諦念の抒情詩『マリエンバート悲歌』(23)、小説における『親和力』(1809)、『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』(29)、そして最後に死を前にして『ファウスト第二部』(31)を完成しました。晩年のゲーテは、青年期の汎神論を捨てて神秘主義的境地に入りましたが、それは人間存在を無限に高進してゆこうとする生命の神秘主義とでも名づけるべきものであります。彼はなお静かに現象の推移を眺め続け、一種の象徴主義をもって、一切のかりそめなもの、移ろうもの、の背後に不変なものを見ようと努めたのです。そうした叡智は、作品のほかに、さまざまな人々との対話、殊に1823年来詩人の死に至るまでゲーテの秘書となった『エッカーマンとの対話』にとどめられております。長い歷程を経たゲーテは、『遍歴時代』や『ファウスト第二部』の末尾において、来るべき時代の現実と思想とにまで接触しております。

ゲーテの文献としては翻訳研究が極めて多数ありますが、森鷗外の『ゲーテ伝』、茅野蕭々『ゲーテ研究』のほか、故木村謹治博士の『若きゲーテ研究』『完成期のゲーテ』は、生涯を詳細に辿った労作で、日本におけるゲーテ研究の画期的作品とされております。最近のものでは相良守峯士著『ゲーテ事典』(河出書房)、高橋健二氏『ゲーテ』(新

潮社)等が、生涯と作品とを大観するのに便であります。また外国人の文献では、特にシュワイツァー『ゲーテ』(小栗孝則氏訳)、トーマス・マン『永遠なるゲーテ』(佐藤晃一氏訳)、ロマン・ロラン『ゲーテとベートーヴェン』(ロマン・ロラン全集)そして殊にポール・ヴァレリー『ゲーテ』(筑摩書房版全集・作家論)等を、お奨めしたいと思えます。1949年(昭和24年)はゲーテの生誕二百年祭にあたり、我国においてもさまざまな雑誌の記念号のほか、ゲーテ研究の編著が多く出版されましたので、それらは比較的入り易く、得るところも多いと思われまます。

7 ロマン主義

ロマン主義の性格 中嶋健蔵氏はその洞察に富んだ好著『ロマンチックについて』において、次のように書いておられます。「ロマン主義もまた、歴史的な成語であると同時に、普遍的な思想を代表することばである。この思想に明確な定義を与えることを、断念しなければならぬほど、あいまいな性格をおびているのが、その特質である。ロマン主義に定義を与えようとする試みは、豊富な材料を手に入ればするほど困難となり、従来も、わずかに失敗を免かれた定義といえ、**「不定なるもの」という逆説的な定義**だけである。何となれば、ロマンチック精神に対する一つの定義のかたわらには、常にそれと矛盾する別の定義があり、互いに抹消しあうからである」。歴史的な一文学運動としてのドイツ・ロマン主義も、実は複雑な要素を併せ含んでいるのであって、簡単には定義できません。

ロマン主義は、十八世紀から起った若い世代の文学運動であります。古典主義がゲーテ・シラーの結合を中心に全盛を極める時期に、それと平行して同時に開花しました。おそらく明確な文学運動としては最初のものでありましよう。それは、合理主義と古典主義とに対する反動として、普遍的な法則に対する個性の権利を主張し、自由な空想の創造を、節度と形式とに代って要求しました。これは或る点では《疾風怒濤》と似ておりますが、《疾風怒濤》の人々が理性を嘲罵したのに対して、たとえばシュレーゲルは《理性人》というものを心臓も髄もない《理屈屋》とから区別し、精神の無限を信じて、魂の最も深い深さを明らかにしようとしたのでした。また《疾風怒濤》は感情というものに絶対の尊敬を払って、敢えてそれに手を触れまいとしたのですが、ロマン主義者たちはそれを分析しようと志しました。

ロマン主義の特色として、自然と生と無限と一になろうとする憧憬というものと、反省と批判とか、対象となった自我を遠くから眺めようとするイロニーというものとが、挙げられます。そしてみたされない無限への渴望と自我の分裂とを前にして、ロマン主義者たちはただひたすら観照するだけであります。そこに彼らの「精神の怠惰」というものが生れるわけです。ルネサンス以来展開してきた自我の意識は、ここで或る意味でひとつの危機現象に逢着したと言えます。文学的には、弟シュレーゲルが《宇宙的で前進的なポエジー》と呼んだロマン的文学は、常に生成の過程にあり、常に未完成たるべきものであって、完璧な形式という観念を欠き、ほとんど断片としてしか表現することができませんでした。しかしロマン主義者たちは、このようにしてよりほかに、常に逸れて転身してゆく現実というものを捉えられないのだ、と考えたのでした。

ロマン派は、文学は神にも貴族にも、おそらくは生活や美的形式そのものにも、仕えるものでなく、何らかの法則にも束縛されずただ自我に仕え、自我の内面を吐露するものである、と強く意識しましたが、反面において、ここにおそらくは芸術至上主義の思想がすでに誕生したのでした。更に、フランスに敗北し、ヨーロッパ社会においていかなる政治的役割をも果さなくなった当時のドイツの国情をも、そしてロマン派の詩人の多くは貴族出身者であったような事情をも併せ考えなくてはなりません。

ロマン主義は極端な長所と極端な短所とを持っていたとも言えましようが、或る意味ではドイツ的感情の自然な傾向の表現とも見られましようし、また文化一般の問題や芸術様式を考える場合に常に問題となるべき精神類型であります。さまざまな意味で今後の研究の進展は、大いに注目に値いするものと思えます。

初期ロマン派(イエナ派) 哲学におけるフィヒテ、シュリング、神学におけるシュライエルマヘルに養われて、若い世代はイエナ、或いはベルリンに集まりました。ドイツ文学においては珍しいことですが、この運動はブルジョワの議論から生れたとすることができます。そして1795年頃から十九世紀初頭までに急激に進展します。

その理論的開拓者はフリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829)です。彼は断片的で逆説的な批評家でありました。ギリシャ文学研究によって登場しますが、『ゲーテのマイスターについて』(1798)が最も知られています。彼は兄とともにゲーテ・シラーに対立するロマン派の雑誌「アテネウム」を創刊してこの運動を推進しましたが、自伝的で自由恋愛を唱えたことからスキャンダルを起した小説『ルチンデ』(1799)では失敗しました。後にはカトリックに改宗し、メッテルニヒに傭われました。兄アウグスト・ウィルヘルム(1767-1845)は、主として弟の理論を組織化したところに意義がありますが、さまざまな翻訳を行い、殊にシェークスピアは彼とティークとのためにほとんどドイツ作家のようになりました。有名なスタール夫人をドイツ・ロマン派の味方に引き入れたのは、彼の力でありました。

ウィルヘルム・ハインリヒ・ヴァッケンローダー(1773-98)は、みずから意識せずして純真なロマン的作品を書き、ロマン派に深い影響を与えました。すなわち『一修道僧の心情の吐露』(1796)であります。これにはティークも協力しましたが、名を秘して発表したため、当時の人々はゲーテの作品かと思ったのでした。ロマン派がニュルンベルクを発見したと言われるのは、この作品でデュラーが高らかに讃美されているからであります。更にティークの『フランツ・シュテルンバルトのさすらい』(1798)の第一部は彼の筆とされており、この作品はロマン派の『マイスター』であり、デュラー門下の画家が冒険を重ねてローマに赴くさまを描いております。彼は夭折しますが、その創作と人格とをもってティークに深い影響を与えました。

ルードウィヒ・ティーク(1773-1853)は、ロマン主義に先立つその『ウィリアム・ロヴェル』(1796)においてすでに、いわゆるプロトイス的と呼ぶべき浮動定めなきロマン的性格を描いております。『金髪のエックベルト』(1797)は、彼の代表作で、ロマン派に童話文学の模範を与えました。またロマン的イロニーの典型である混乱した戯曲『長靴をはいた牡猫』(1797)、カトリック的中世を描いた悲劇『聖ゲノフェファの生涯と死』(1799)等の戯曲があります。彼は後に写実主義的傾向に移りますが、生涯を通じて極めて多作であり、文学活動に活躍しました。ノヴァーリス、クライスト、レンツ等の遺稿を整理出版したことも彼の業績であります。またシュレーゲルとのシェークスピア共訳、更にセルヴァンテスの名訳(1799)は、不朽の仕事でありましょう。

ノヴァーリス(本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク)(1772-1801)こそ、初期浪漫派の代表的詩人でありました。科学に熱中した詩人、哲学者、神秘家であった彼は、そのいわゆる《魔術的観念論》によって、短い生涯をただひたすら夢に燃焼しました。彼は十四歳の純真な少女ゾフィーを愛し、しかもその死に会う悲痛な体験をします。『夜の讃歌』(1800)は、死と夜と愛とに捧げられた散文詩であります。『ハインリヒ・フォン・オプターディングン---青い花』(1802)は、未完であります。ロマン主義とは何であるかを最もよく示す夢の小説であります。同じく未完の『ザイスの学徒』中には、「薔薇とヒヤシンス」というロマン的童話文学の代表作が挿入されております。彼の思想を示すものとして『断片』があり、更に『キリスト教世界、或いはヨーロッパ』(1799)では、統一的な文化を持つ中世を回顧して、ロマン派の人々に深い影響を与えました。ノヴァーリスの参考文献としては、小牧健夫氏『ノヴァーリス』(桜井書店)、丸山武夫氏『ノヴァーリス』(世界評論社)があります。

ロマン派の女性たち なおイエナ派の周辺でフリードリヒ・シュレーゲルの妻ドロテア、ウィルヘルムの妻で後にシュリングの妻カロリーネ(シラーは彼女を「悪魔夫人」と呼びました)、ベルリンのサロンの女主人ラーヘル・レーヴィン等の女性の活躍は、

すこぶる興味があります。更に後期ロマン派に属するブレンターノの妹で後にアルニムの妻ベッティーナ(彼女の『ゲーテと或る子供との文通』(1835)は、誇張と歪曲とがあるとはいえ異色ある文献です)、彼女と交わりのあった薄倅の女流詩人ドイツのサフォー、カロリーネ・フォン・ギュンデローデ、またブレンターノが看護してそのヴィジョンを集めた神秘的尼僧カテリーナ・エメリヒ等、ロマン派における女性の位置は軽視できぬものがあります。

ハイデルベルク派 十九世紀初頭に早くもロマン派は離散します。ノヴァーリスは夭折し(1801)、弟シュレーゲルは東洋学を学びにパリに去り、ティークはオーデル河畔フランクフルトに移り(02)、兄シュレーゲルはスタール夫人との旅行に出ます(03)。けれどもロマン主義を継承すべき第二の世代がすぐ続きます。それは初期のとはちがい形而上学的基礎や同志的結合もより稀薄であり、瞑想に耽ることも少いですが、或る意味では現実意識をいっそう持ち、いわゆる《魂の夜の側面》に眼を注ぎます。

その第一のグループは、ロマン的な美しい古城の町ハイデルベルクに集まります。この派は特に、ドイツの民謡と民話との蒐集によって大きな貢献をしました。クレメンス・ブレンターノ(1778-1842)は、全く空想に養われて長篇『ゴドヴィ』(1802)を書き、その純真な夢想を民謡本の材料に托して短篇『勇敢なガスパールと美しいアンナーレとの話』を書きました。またアヒム・フォン・アルニム(1781-1831)は、中世の歴史に取材して民族への奉仕を望みました。長篇『王冠の守護者たち』(1817)があります。なおこの両者は協力し、始めて純然たるドイツ民謡集を集め『子供の魔法の角笛』(1808)と名づけましたが、単なる蒐集ではなく、彼らの加筆の効も多いものと思われまふ。このなかの歌謡はマーラーの交響曲にも織り込まれております。

グリム兄弟、すなわちヤーコプ(1783-1863)とウィルヘルム(1786-1859)とは、いっそう堅実な人々で、協力して『童話集』(1812)を集めましたこれは聖書とともにドイツのあらゆる家庭の炉辺の友となりました。彼らはすぐれた言語学者で、『ドイツ文法』を遺し、ドイツ語の最も重要な辞典の編集を進め、その方面の功績も忘れることができません。

北ドイツ人派 ハイデルベルクでこのように民衆の自己意識を振り立たせようとしているあいだに、北ドイツでもロマン主義が見られます。このように一括してみましたが、実は彼らは多かれ少かれ孤立しております。しかもそれぞれ異常な個性であって、彼らを忘れることは到底できません。

ハインリヒ・フォン・クライスト(1777-1811)は、初期ロマン派の同時代人であります。个性的でデモニッシュな存在であります。彼は最も厳しいリアリズムと最も奔放な空想とを結びつけようとしてしました。ゲーテのイフィゲーニエに対するアンチテーゼたる『ペンテジレーア』(1807)の情熱、『ハイルブロンンのケートヒェン』(1810)の童話的雰囲気と没我的献身、は決定的にロマン的な性格を帯びておりますが、同時にこの詩人の振れの激しい性格を物語るものでもあります。また『ヘルマン戦争』(1808)と『ホンプルクの公子』(1810)とは、ロマン的国民感情の表現であります。同時に彼はモリエールによる『アンフィトリオン』(1807)、『壊れ甕』(1811)によってドイツには珍しい力強い喜劇を遺しました。彼はまた短篇小説家として抜群の力倆を持っております。いずれも筋の迫力と文体の堅牢さによって異常な魅力を具えておりますが、中篇『ミヒャエル・コールハウス』(1808)は、宗教改革期の一商人の、貴族の不正に対する滅びて止まぬ徹底的反抗を物語って、ひとつのドイツ的性格と名づけるべきものを描き出した力篇であります。ワイマルのジュピターは、この情感性の化神そのものである詩人を斥け冷遇しましたので、絶望した彼は、新聞の編集にも失敗したのち、自分と同様に不幸な運命を持つフォーゲル夫人とともにベルリン郊外ヴァン湖で自殺して果てました。彼の墓碑には「彼は死を求め、永遠を見出せり」とあるということでもあります。シュテファン・ツヴァイクがこの自殺をクライストの最大傑作と呼んだのは、けっして洒落ではなかったでしょう。なぜならば奇しくもツヴァイク自身クライスト的な死を選んだから

であります。

更に二人の奇妙な無軌道の人物が劇作家として挙げられます。『マルチン・ルター』(1807)と『二月二十四日』(1810)の作者ツァハリアス・ウェルナー(1768-1823)と、『ナポレオン』(1831)、『ハンニバル』(1835)等の歴史劇を書き、二人の文学的人物典型を結合することによって野心的である『ドン・ジュアンとファウスト』(1829)を遺したクリスチャン・ディートリヒ・グラッペ(1801-36)とであります。後者はしばしばロマン主義からリアリズムへの過渡の作家と見られ、彼みずからもロマン派を呪いましたが、この傾向を脱することができませんでした。

アーダルベルト・フォン・シャミソー(1781-1838)とラ・モット・フーケ(1777-1843)とは、いずれもフランスの血を引き、おだやかなロマン主義とリアリズムの萌芽とを併せ持った一組でありました。前者の『ペーター・シュレミール奇譚』(1827)、後者の短篇『妖精』(1811)は、いずれも後期ロマン派の忘れられぬ作品です。

E・T・A・ホフマン(1776-1822)は、司法官であり、モーツァルトに心酔して特にアマディウスの名を称しさえした音楽家でありました。彼においてロマン主義者は著しく現実感覚を取戻したと言われております。しかし同時に、強い空想力と一種の幻視的能力との所有者であります。幽霊や分身[ドッペルゲンガー]は彼の独壇場であります。『夜曲集』(1817)と『セラビオン同人集』(1821)、長篇『悪魔の霊液』(1816)、未完の『牡猫ムルの人生観』(1822)が特に知られております。

ヨゼフ・フォン・アイヒェンドルフ(1788-1857)は、シレジアの詩人で現実を夢の調子で色どっており。長篇『予感と現在』(1815)によってよりも、愛すべき短篇『或る怠け者の生活から』(1826)によって知られております。彼は抒情詩人として、自然を心温く民謡の調子で讃えました。彼の詩は今日ではほとんど民謡となり、またヴォルフの作曲で有名であります。シューベルトのリード『冬の旅』『美しき水車小屋の乙女』で有名なウィルヘルム・ミュラー(1794-1827)は、アイヒェンドルフから影響を受けました。

愛国詩・シュワーベン派・等 新しい国民感情は、1813-14年の自由解放戦争を機として、モーリッツ・アルント(1769-1860)、「ラインの護り」の作者マクス・フォン・シェンケンドルフ(1783-1817)、特に戦死したテオドール・ケルナー(1791-1813)等の愛国詩を生みました。ドイツの教科書は常に彼らの名を忘れません。

またシュワーベンには、小さなグループが生まれます。この派はいわゆる古典的ロマン派と呼ばれる温雅な詩風が支配的で、ヘッベルにも影響を与えた、そしてフランクフルト議会で政治家としても或る種の役割を演じたルードウィヒ・ウーラント(1787-1862)を中心に、グスターフ・シュワープ(1792-1850)とユスティヌス・ケルナー(1786-1862)、スコットを模した小説『リヒテンシュタイン』(1826)作者で童話作家として知られているウィルヘルム・ハウフ(1802-27)等が、これに属します。この派は祖国の懐かしい現実を歌ったのですが、ハイネに鋭い嘲罵を浴せられました。

最後に孤立したハンガリー生れの浪漫的詩人レーナウ(1802-50)があります。彼はいくつかの劇詩・叙事詩を書き、彼もまた『ファウスト』(1836)のテーマを扱いましたが、その真髄は暗い美をもって詩人の孤独・自然愛・憂愁を歌った抒情詩にあります。彼の「葦の歌」を知らぬ人はいないでしょう。彼はいわゆる世界苦の象徴的存在でありました。

ロマン主義は 1825 年頃からほとんど凋落します。すでに見たうちにも、現実的傾向への過渡的なものを含んでいる人々が、いくたりもあります。そして 1830 年頃からリアリズムへの強い転回が見られます。また一方では、アウグスト・フォン・プラーテン(1796-1835)のように、古典主義に復帰して、ロマン主義に対する公然たる闘いを行った詩人が出ました。彼はイタリアに旅行し、ソネットにおいて厳格な形式を持つとうとし

た特異な詩人でした。こうして両側から、ロマン主義者はその終熄を告げられます。

ロマン主義の参考文献としては、故茅野蕭々氏『独逸浪漫主義研究』（三省堂）、高橋義孝氏『ドイツ浪漫派』（青木書店）、小牧健夫氏『ドイツ浪漫派の人々』（弘文堂）があります。

8 写実主義

若きドイツ派 1830年頃から、ドイツの思想と文学とは、觀念論と精神主義とから生の現実に向います。以後自然主義までの約半世紀は、いわゆるドイツ写実主義の時代と呼ばれておりますが、実はさまざまな屈曲と傾向とを持つものです。しかしまず先頭を切って、今までの文学とは明確に異なる徴候が見られました。それが《若きドイツ派 [ダス・ユンゲ・ドイチュラント]》の運動であります。1835年ドイツ連邦議会は、ウィーンバルク、ハイネ、ラウベ、グツゴウ、ムントの五人の文学者の著書を発売禁止し、彼らを国外追放に処しました。それらの人々は亡命作家として移民文学を形づくるわけですが、これらの人々は自由の国フランスに向い、メテルニヒ治下の封建ドイツを攻撃し、ペンの護民官として自由を唱え、また文学の政治化を要請しました。彼らは往々詩を犠牲としても政治に奉仕しています。そして彼らとともに文学の領域に始めて政治と議論とが入ったのでした。

ハインリヒ・ハイネ(1797-1856)は、そのうち最も天稟ある詩人です。彼は最後のロマン派詩人として出発し、不滅の詩集『歌の本』(1827)によって名声を博しました。そのうち「北海」の詩群は抒情詩の新しい世界をつくったものとして有名であります。また『ハルツ紀行』(1824)等の旅行記によって大散文家のひとりに数えられます。1830年七月革命を機としてフランスに赴き、サン・シモン、殊にその弟子アンファンタンの思想に帰依し、社会主義を信奉します。そしてジャーナリストとして無類の才能を示しました。『ロマン派』(1836)は、ドイツ近代文学批判として、その有名な毒舌と機智とによって知られております。作品としては『ドイツ冬物語』(1844)が48年の二月革命頃から、幻滅の詩人は宗教的境地に回心したと言われますが、『譚詩集』(1851)は極めて美しい作品です。彼は終始、芸術と革命、詩と批評精神との矛盾に悩んだ問題的な性格の持主で、ニーチェは『この人を見よ』において、ハイネの「神々しい悪意」を絶讃しております。ユダヤ人的側面やまた独仏両国間の架橋としての役割において、多くの興味を残しております。彼は世界各国の近代詩に独詩人中最も影響を与えた人物です。そして詩人ハイネの声は、おそらくシューベルトの『白鳥の歌』やシューマンの『詩人の恋』によって最もよく私たちが聞き取ることができます。

ルードウィヒ・ベルネ(1786-1837)はいっそう徹底した論客で『パリ書簡』(1831-34)によって知られ、この派の理論家ルードルフ・ウィーンバルク(1802-72)は、『美学征伐』(1834)によって知られております。カール・グツコー(1811-78)は多作な活動的作家で、啓蒙的悲劇『ウーリール・アコスタ』(1846)と、筋の並行した時代小説『精神の騎士たち』(51)とを書きました。ハインリヒ・ラウベ(1806-84)は、三部作『若いヨーロッパ』(1833-37)の作者であります。特にウィーン劇場監督としての活躍で知られております。

この派の運動はドイツに革命詩人の群れを生みましたが、ドイツの国歌であった「ドイツ、すべてに冠たるドイツ」を歌った詩人ホフマン・フォン・ファールスレーベン(1798-1874)、行動的詩人ゲオルク・ヘルヴェーク(1817-75)、グリューンという匿名で書いた伯爵アレクサンダー・フォン・アウエルスベルク(1806-76)、そしてマルクス主義を信奉した『信仰告白』(1844)の詩人フェルディナント・フライリヒラート(1810-76)等がおります。

ゲオルク・ビュヒナー(1813-37)は、この派の周辺にあった極めて特異で、かつ最も才能ある劇作家であります。革命劇『ダントンの死』(1835)は、ダントンとロベスピエールとの対立を描いたペシミスティックな作品で、彼の代表作であります。また人生の

操り芝居で或る喜劇『シオンスとレーナ』と社会劇の先駆的作品である断片悲劇『ヴォイツェック』とを書きました。彼はレンツの生涯を小説化しましたが、実際、《疾風怒濤》と自然主義とを結ぶところに彼の位置が占められており、わずかに薄手の一巻にとどまるものを遺しただけでのその夭折は、痛惜されております。

《若きドイツ派》は、芸術作品として多くのものを遺したとは言えないかもしれませんが、時代にさきがけたこの運動は挫折したにせよ、今日の問題と直接つながるものを持ち、再認識に努めている研究者も多いようであり、注目する必要があります。

写実主義への推移 《若きドイツ派》は明瞭な指向性を持っていた運動でありましたが、写実主義と呼ばれるうちにもさまざまな色彩と段階とがあって、かならずしも明確には区分することはできません。ドイツにおいては特にロマン的雰囲気相当濃厚に残存したことは否定できない事実であろうと思います。

オーストリーの戯曲作家フランツ・グリルパルツェル(1791-1872)は、観念論の伝統との結びつきと形式美とによってワイマルの古典主義と関係があり、作の気分やスペイン趣味によってロマン主義と関係があり、心理分析的な配慮によって写実主義と関係づけられます。成功した処女作の運命劇『祖妣[そひ]』(1817)においてはウィーン民衆劇の影響が認められ、幽霊や強盗が現われて不自然さを免れておりませんが、爾後秀れて古典的統一を持った多くの作品を書きました。ギリシャの取材した『サフォー』(1819)、三部作『金羊皮』(20)、『海の波、恋の波』(40)の一群は、特に有名でもあり、傑作でもあります。そのほか『オトカール王の運命と最後』(1825)、『主君の忠僕』(28)『ハプスブルク家の兄弟争い』(17)のオーストリー史による悲劇の一群、喜劇『欺く者に禍あれ』(1840)、小説『哀れな辻音楽師』(48)等を書きました。

カール・インメルマン(1796-1840)は、写実小説の開拓者と呼ばれる作家であり、問題的な性格が強く見られます。新旧両時代の対立する過渡期を描いた『末裔者たち[エピゴーネン]』(1836)、有名な法螺吹き男爵の物語にかりてメッテルニヒ時代を諷刺した『ミュンヒハウゼン』(1839)があります。後者にかなりルーズに挿入された『オーベルホフ』は、農民小説の先駆的作品としてそれだけ独立してもしばしば問題にされます。

フリードリヒ・ヘッベル(1813-63)の戯曲家としての位置は、極めて重要なものがあります。彼は刻苦勉強によって巨大な理念の建築に従事し、いわば理想の現実化に努力したのでした。全体と個、男性と女性、というような対立において、思想性の強い戯曲が書かれております。主人公たちの悲劇的運命には、北方的な意志の犠牲の典型が見られます。『ユードイット』(1841)、『ゲノフェーフア』(44)、『ヘローデスとマリアムネ』(50)、『ギーゲスとその指輪』(56)といったように、その取材の時と処とは極めて多彩ですが、市民悲劇『マリア・マグダレーナ』(44)、「ドイツ悲劇」と副題して国家観を表白した『アグネス・ベルナウエル』(58)が問題作であります。彼はまた『ニーベルンゲン三部作』(55-60)によってこの国民叙事詩を忠実に劇化し、細かな心理づけを行っております。なお彼は多くの日記を残し、文学的に珍重されております。

郷土文学の勃興 一方ドイツの各地方において、大地の味わいの深い郷土文学が生れて、その面から写実主義時代の到来を告げます。その最初の贈物はスイスからなされました。ハインリヒ・ダニエル・ツショッケ(1771-1848)の『農民の鏡』(1836)、イエレミアス・ゴットヘルフ(1797-1854)の名で書いた牧師アルベルト・ビツィウスの『下僕ウリ』(1841)、『小作人ウリ』(48)、『チーズ製造所』(50)であります。これらの作品はペスタロッチの『リーンハルトとゲルトルーデ』と同じように農民教化の目的をも持っていました。

同時代にベルトルト・アウエルバッハ(1812-1882)は、『アレマニヤ詩集』(1803)の著者である同郷のフリードリヒ・ヘーベル(1760-1826)に続いて、『黒森小村物語』(1843-54)の連作を書きました。

オーストリーでは、ルードウィヒ・アンツェングルーバー(1839-89)の農民劇・農民小説が有名ですが、ウィーンの人で実際には田園に入らなかった彼よりも、ペーター・ロゼガー(1843-1918)の名を忘れるべきでないでしょう。

ビーダーマイヤー文学 《若きドイツ》は、社会に向って攻撃の鋒[ほこ]を振いましたが、その頃別の系統の作家たちは、内面の平和に向いました。彼らはデモーニッシュなもの克服し、英雄的・活動的な生活を断念し、静寂と節度とを生活理想として、眼差しを専ら《小さきものへの愛》に注ぎました。これが、成就せぬ革命期に生きる諦めの心境に傾いた市民階級の広い共感を呼んだことは、想像に難くありません。ところで《ビーダーマイヤー》という名称は、アイヒロットという当時の詩人が詩集の表題につけた架空のシュワーベンの小学校教師の名から出たのですが、主として家具などの工芸上の用語として使われるようになったものです。これは文学上の用語としては異論もあり、かならずしも熟しておりません。ふつうに《詩的リアリズム》と呼ぶ言葉もかなり曖昧であります。それと重なる部分を持つ、1830-50年頃の文学と見て大して差支えないでしょう。

エドアルト・メーリケ(1804-75)は、ふつう《シュワーベン別派》流れを汲む詩人とされており。彼は非時代的な詩人でしたが、今日ではドイツ抒情詩の流れのうち最も重要な存在のひとりとして見做されております。ヴォルフの作曲と渾然融和しているのも、この詩人の性格を物語る何ものかでありましょう。彼は、穏和で端正な形式によって古典的であり、民謡や物語詩や童話の世界においてロマン的ではありますが、牧歌的雰囲気をつきと描くことによってリアリスティックであり、更に人間の魂の明暗と意識下の情感とを描き出す点で近代的であります。『詩集』(1838)のほか、教養小説『画家ノルテン』(32)を遺しましたが、短篇『プラークへの旅上のモーツアルト』(55)は、ロココ的雰囲気の中にこの大作曲家の姿を活写したものとして繊細かつ完成した作品です。

アンネテ・フォン・ドロステ=ヒュルスホフ(1797-1848)は、ドイツ最大のカトリック女流詩人であり、ウェストファリアの風物を細密な現実感覚をもって歌いました。『詩集』(1838-44)のほか、短篇『ユダヤ山毛櫨』(42)は、その地方の農民生活を美化することなく描いた写実小説として知られています。

アーダルベルト・シュティフター(1805-68)は、ボヘミアの風物を倦むことなく描きました。彼は、風の息吹きや麦の発育を嵐や火山のうねに置いた、静けさと節度との作家で、些細なものに対する敬虔の念を表現し、古典主義的観念論の流れを汲んでおります。短篇の『習作集』(1844-50)、『さまざまな石』(54)のほか、十二世紀ボヘミアの年代記『ヴィティコー』(67)がありますが、『晩夏』(57)は一種の教養小説で彼の代表作であります。ただ冗長の観は免れませんので、ヘッベルはこの作品を読み終えることのできる人にはポーランドの王冠を約束してもよい、と言ったそうですが、ポーランドの貴族の出であることを自称していたニーチェは、まさかその王冠を欲したからではないでしょうが、この小説をドイツの最も秀れた散文のひとつに数えました。詩的リアリズムの時代はドイツ文学の「秋の時代」と呼ばれますが、この作品の静かな諦念的な空気は、その呼び名の意味するところをそのまま伝えております。

ミュンヒェン詩派 ここで幕間の小さな間奏曲を挿入しなければなりません。バイエルンの国王マクス二世の庇護の下に、ミュンヒェンには1850年頃から、主として北ドイツの詩人たちが集まりました。彼らは形式主義的芸術派とすることができます。そのうち最も有名なのはエマヌエル・ガイベル(1815-84)であり、また文学の各ジャンルに亘って極めて多作であったパウル・ハイゼ(1830-1914)であります。彼は晩年ノーベル賞を貰いましたが、今日ではかなり古びて見えます。しかし短篇小説において最も秀れ、『ララビアタ』(1855)は特に有名であります。

詩的リアリズム 前に述べましたように、詩的リアリズムというのは、ビーダーマイヤー的1850年頃から自然主義に至るまでのドイツ文学の主潮をこのように名づけることができます。それは、客観的現実を深く精神化しようとするものであります。

ゴットフリート・ケラー(1819-90)は、おそらくスイスの生んだ最大の作家ですが、ハイデルベルクで哲学者フォイエルバッハの講義を聞き、ロマン主義から写実主義へと発展しました。彼は真に秀れたユーモア作家でありました。短篇集には『ゼルトヴィラの人々』(第一巻・1856 第二巻・74)、『七つの伝説』(72)、『チューリヒ短篇集』(77)があります。最初の作品のうち「顰面[しかめつら]のパンクラーツ」「村のロメオとユリア」「幸福の鍛冶屋」「馬子にも衣装」等は、広く愛読されている劇的な筋に富む短篇であります。長篇としては、マイスター的教養小説『緑のハインリヒ』(1855)と政治的時代絵図『マルチン・ザランダー』(86)とがあります。前者はその陰鬱な結末を改めて、改作が1880年に発表されました。

コンラート・フェルジナント・マイヤー(1825-98)は、ケラーと並ぶスイスの作家ですが、ケラーの豪快さに比していっそう繊細な芸術家的気質の持主でありました。叙事詩『フッテン最後の日々』(1871)、長篇『ユルク・イエナッチ』(74)のほか、デッサンの鮮やかな数多くの短篇を書きました。『護符』(73)『説教壇からの発射』(78)、『聖者』(79)、『僧の婚礼』(84)、『裁きの女城主』(85)等が有名で、その多くはいわゆる粹小説の形式をとって、ひとりの語り手に物語らせております。彼は豊富な歴史的知識を駆使し、文章は極めて彫琢され、ドイツでは彼の作品を多く教科書に採用して文章の模範としているそうであります。また詩人としても、リルケのいわゆる《事物詩》の先駆者として造型に努めましたが、そのうち「ローマの噴水」は最も知られています。

オットー・ルードウィヒ(1813-65)は、作家であり同時に理論家でありました。ヘッベルの競争者として戯曲を書きましたが、そのうち写実的運命劇『世襲山林監督』(1848)だけが残りました。小説では小村物語『陽気娘』(1855)、暗い運命小説『天と地の間』(56)があり、後者は心理把握に秀れ、ドイツの心理小説の開拓的地位が与えられております。

テオドール・シュトルム(1817-88)は、フリーゼン地方の風光と魂とを歌い、描きました。彼は叙情味にあふれて心情の深さを表わすいわゆる「追憶の短篇」を多く書きました。『インメン湖』(1849)、『遅咲きの薔薇』(59)、『大学時代』(62)、『聖ユルゲンにて』(67)、『三色堇』(73)、『水に沈む』(75)、『グリースフース年代記』(83)等が知られもし美しくもある作品ですが、晩年の長篇『白馬の騎者』(88)は力強く、ひとつの伝説を創り上げております。彼は詩人として四百数十篇の抒情詩をも書きました。

ウィルヘルム・ラーベ(1831-1910)は、新しい時代のジャン・パウルであります。温い愛で小市民の世界を描いた『雀横町年代記』(1857)以後、『飢餓牧師』(65)、『アブ・テルファン』(67)、『屍体運搬車』(70)等を書きました。それらにはつつまじやかで純粹なリアリズムが見られます。

テオドール・フォンターネ(1819-98)は、写実主義の最後の作家で、すでに自然主義的な手法を導入し、次の時代に影響を与えました。『嵐の前』(1878)、『迷路』(88)、『イエニー・トライベル夫人』(92)、『エフィ・ブリスト』(95)等多数の作品を書き、当代の人々に広く読まれましたが、フランスの血統を引く彼は特に会話に才能を持っておりました。

歴史小説と時事小説 写実主義的傾向のうちに、多くの歴史小説が書かれました。C・F・マイヤーもそのひとりですが、ウォルター・スコットの影響を受けたと言われるウィリバルト・アレクシス(1798-1871)、小説『エッケハルト』で知られているヴィクトール・シェップフェル(1826-86)、ミュンヘンの文化史教授ウィルヘルム・ハインリヒ・リール(1823-97)等がおります。

グスターフ・フライターク(1816-95)は、極めて多作であり、有名な喜劇『ジャーナリスト』(1854)の後、『貸借』(55)『失われた写本』(64)、八巻の大作『ドイツの過去

の諸像』(72-80)等の小説を書きました。

フライタークと同じように時代絵図を描くことを企て、それを徹底させて時事小説[ツァイトロマン]と言われるジャンルを創り自然主義に影響を与えたのは、フリードリヒ・シュピールハーゲン(1829-1911)であります。『問題的な人々』(1861)はその代表作ですが、彼は同時に小説の理論家であり、小説作家が自己の意見を作品の表面には絶対に出すべきでないことを唱えました。

9 自然主義から印象主義へ

自然主義 1880年から90年までは自然主義の勃興した時期であります。1871年普仏戦争の勝利に基づくドイツの繁栄時代は、この国を急激に近代化します。農業国から工業国への転換は眼ざましいものがありました。一方それに伴ってプロレタリアの問題は深刻化せざるを得ません。十九世紀後半の市民的写実主義では捉えられない新しい現実が、文学者たちの前に提示されたのでした。

初期の自然主義は、ベルリンのハインリヒ・ハルト(1855-1906)、ユリウス・ハルト(1859-1930)の兄弟によって開始され、彼らの『批評的闘争』(1882-84)は、新しい芸術のための理論的闘争を行いました。ウィルヘルム・アレント(1864-)は『近代詩人集』(1884)を出版し、無名作家のアンソロジーを輯[あつ]めました。その序文を書いたヘルマン・コンラーディ(1862-90)は、才能がありましたが夭折しました。一方ミュンヘンでは、1885年ミヒャエル・ゲオルク・コンラート(1846-1927)を中心に、新文学を唱える「社会」が創刊されました。自然主義の理論を提唱した論文として常に挙げられるのは、カール・ブライプトロイ(1846-1900)の『文学の革命』(1886)、ウィルヘルム・ベルシェ(1861-)の『詩の自然科学的基礎』(1887)の二つであります。

初期自然主義は理論に捉われて、ほとんど芸術創造の成果を挙げ得ませんでした。次の段階は理論と実作とにいつそう進境を見せ、しばしば《徹底自然主義》と呼ばれております。それはアルノー・ホルツ(1863-1929)とヨハネス・シュラーフ(1862-1941)との協力によって推進されました。その成果たる『ハムレット親爺』(1886)は素描集です。両者は分裂しますが、それぞれ若干の作品を遺しました。自然主義の誕生を広く世に告げたのは、無名作家ハウプトマンの処女作『日の出前』(1889)のベルリン・レッシング劇場における《自由舞台》による上演でありました。賛否両派の観客のあいだに騒動を惹き起したくらいです。ハウプトマンは続いて、シレジアの坑夫の騒動に取材した『職工たち』(92)によって、その地歩を固めました。

ヘルマン・ゾーデルマン(1857-1928)はすでに小説『憂愁夫人』(1887)によってデビューしておりましたが、ハウプトマンに続いて同じ劇場で上演された『名誉』(89)によって成功を収めました。彼の戯曲『故郷』(90)は、その女主人公マグダという典型を遺しました。そのほかマクス・ハルベ(1865-)の『青春』(1893)も、この系統の戯曲に位置づけられます。なお多くの劇作家の名がありますが、今日ではほとんど忘れられております。

印象主義 自然主義にわずかに後れて続く印象主義は、それを自然主義の延長と見る文学史家も多くあります。この流れについてはすでに二十世紀文学について述べたときに触れましたが、世紀末の詩人たちについてなお少し補っておきます。

デートレフ・リリエンクローン(1844-1905)は、無意識の印象主義者で、自己の体験を率直に告白した詩人であります。『副官騎乗』(1884)以後、89年と91年とに『詩集』を刊行しました。

リヒアルト・デーメル(1863-1920)は、リリエンクローンと並んで挙げられる詩人ですが、事実この二人は交友がありました。彼は、いつそう矛盾に悩む問題的性格を持つ

ておりました。『解放』(1891)『だが愛は』(93)、『女と世界』(96)、『二人の人間』(1903)において、なまなましい官能性を歌い、女性のうちに人間の解放者を認めております。彼の詩の影響力は当時大なるものがありましたが、彼は一方「民衆的でない芸術はすべて芸術でない」という主張を持ち、社会的感情の処理に悩みました。民族愛と人類愛との対立に苦しみながら、57歳で大戦に志願したのも、彼の側面を物語る事実であります。

これらの開拓者に続くものとして、「山の彼方の空遠く.....」という上田敏訳で我国にも知られるカール・ブッセ(1872-1919)、グロテスクなほどコミックな『絞首台の歌』(1905)の作者として知られており、最近再認識されつつあるように思われるクリスチャン・モルゲンシュテルン(1871-1914)一時ゲオルゲ派に属したこともありエキゾチックな詩を遺している世界放浪の耽美的詩人マクス・ダウテンダイ(1867-1918)等があります。

新ロマン主義の先駆者 なおここで二十世紀初頭に出現する文学者たちに与えたショーペンハウエル、ワグナー、ニーチェの影響力を考えますと、彼らの名を特筆しなければなりません。アルトゥール・ショーペンハウエル(1788-1860)は、厭世的哲学者でありましたが、その審美的な態度、喧伝される名文によって後世に与えた影響は大であり、殊にニーチェに対するそれは深いものでありました。彼の主著『意志と表象としての世界』(1819)その他のエッセイは、そのまま文学として読むことができます。リヒアルト・ワグナー(1813-83)の音楽家としての偉大さは今更言うまでもありませんが、その楽劇のテキスト、戯曲篇、そしてパリ時代に書いた「ベートーヴェンへの巡礼」「パリの死」「幸福な夕べ」の三短篇によって、文学史に深いつながりを持ちます。彼は若いニーチェに深刻な影響を与えましたが、またフランス象徴主義に与えた影響も周知のとおりであります。フリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)は、生の哲学者として二十世紀文化全般との関連が極めて密接ですが、その『ツァラトゥストラ』(1883-85)において、また印象的な抒情詩や思想詩において、秀れた詩人であることを示しております。また彼のすべての著作を通じて、偉大な著作家、稀有のスタイリストでありました。ワグナー=ニーチェの新ロマン主義に与えた影響は忘れることができません。ニーチェの死は、二十世紀の開始と重なります。ニーチェの参考文献としては、ヤスパースほか多くの翻訳もありますが、氷上英廣氏『ニーチェ』(新潮社)があります。